栃木県現存植生図解説

宇都宮大学農学部

薄　井　　宏

関東平野の北縁に位置する栃木県は，県南渡良瀬遊水池の海抜１５ｍの地から日光白根山2,５７８ｍの地域をふくんでいる。したがって森林植物帯の垂直分布から云えば，高山帯，亜高山帯，山地帯，低山帯，丘陵帯，台地帯低地を包含し，夫々に特有の森林植生が発達していることになる。

県の中央部を占める台地，低地帯は水田と畑地が開け，農業生産の中心部をなす。特に台地は，いわゆる関東ロームとよばれる火山灰土壌が厚く積りその給源火山は赤城山と日光男体山であることが分っている。中央部の水田畑地帯をはさんで東に八溝山地，西に足尾山地が南北にのびている。この二つの古い地質からなる山地は，標高がほゞ２００ｍから６００ｍの間におさまる低山帯で，特にスギ，ヒノキの造林が盛んな林業地帯である。

県の北西部は標高1,５００ｍを越える山岳地帯で，日光，高原，那須の火山群が連なり，その西側は古生層と第三紀層からなる下野山地が県境と火山群の間に位置している。

栃木県の主な河川はほとんどこの北西部山岳地および足尾山地に源を発し中央部の台地を開析して南流する。

日本列島を東西に二分する日本海型気候と太平洋型気候の区分にしたがえば，栃木県は北西部山地の一部を除いてそのほとんどの地域が太平洋型気候域に属している。太平洋型気候の特徴は，冬季積雪が少なく，夏に雨の多い点にある。冬季季節風（シベリア気団）が日本海を渡る際に初めは乾いた冷気団であったものが，日本海の海水に暖められて不安定な湿った気団に変化

し，日本海側の山地につき当って上昇すると，断熱冷却のために多量の雪をおとすことになる。こうして日本海側に多量の降雪をもたらしたあとでは，シベリア気団は再び乾いたものに変化し，それが太平洋側の山々を吹きおろすことになる。男体おろし，高原おろし，那須おろしとよばれるおろし風は，栃木県の冬の気候を特徴づけている。

年雨量は山地帯で1,600㎜～2,200㎜，低山帯以下では1,300㎜～1,600㎜の間にある。

年平均気温は台地帯でほゞ13℃，山地帯（1,600ｍ）では3.6℃である。年平均気温13℃という値は，かつて本多静六が冷温帯と暖温帯を区別する際の目印しとした値であって，最近鈴木時夫によって中間温帯と名付けられた地域に属している。このことは本県の森林植生を考察するに当たってかなり重要な意味をもってくる。概して云えば，低山帯以下の森林にあっては暖温帯の常緑性の低木や高木が混り山地帯にあっては冷温帯落葉広葉樹林となるちがいがある。

5. 資料リスト

番号	筆者名(または発行者名)	発行年(西暦)	資料名
1	薄井　宏	1961	ササ型林床優占種の植物社会学的研究 宇都宮大学農学部学術報告
2	〃	1955	〃 奥日光の森林植生
3	栃木県	1974	第1回現存植生調査報告書

6. 調査担当者名簿

番号	氏名	所属	分担分野
1	薄井　宏	宇都宮大学教授	総括責任者
2	梶返恭彦	〃　学生	植生調査
3	櫛田行宏	〃　〃	〃
4	佐々木和則	〃　〃	〃
5	福田　昭	〃　〃	〃
6	宮沢光子	〃　林学研究室	表・図面取りまとめ
7	青山　広	栃木県環境観光課自然保護係長	事務責任者
8	鈴木一好	〃　〃　主事	事務担当者

第２回　自然環境保全基礎調査

植生調査報告書

昭和５５年３月３１日

編集　　栃　木　県

環境庁委託調査